

中間報告会 講演記録

1 会議名 平成28年度文部科学省フリースクール等で学ぶ不登校児童生徒への支援モデル事業委託調査研究中間報告会「スマイルファクトリーと池田市教育委員会 13年間の歩み」

2 日時 平成28年11月25日(金) 10:00~16:30

3 会場 池田市立くれは音楽堂

4 参加者 大分県教育庁生徒指導推進室 指導主事 宮崎 好治

5 内容

(1) フリースクール「スマイルファクトリー」の紹介

<代表 白井智子氏の説明>

- 現在スマイルファクトリーには、平日で50名前後の子どもたちが通っており、小学生から20歳までの子どもたちがいる。
- 統合によって廃校になった学校を活用させていただいている。
- 小中学校は学校長判断で出席扱いとなっており、高校は通信制高校と提携し、3年間で高校卒業の資格がとれる。
- 異年齢交流で活動を行なっている。異年齢の方が自分と比較しなくてよいのでその方がよい。



白井智子校長

<関係者によるフリートーク：卒業生、保護者、体育教員、白井校長、大学教授>

- 卒業生：学校に行けていない時は人との関係が薄くなっていた。スマイルファクトリーに通うことにより、異年齢の人との関わりや人生についていろいろなことを学ぶことができた。
- 卒業生：やはり学校は年間行事が決まっていて、授業があり、テストがあり、同年齢の人と過ごすことが決められているが、スマイルファクトリーはしんどさを持っている子どもたちに柔軟に寄り添ってくれる。
- 卒業生：大学生になって戻ったが、同年齢の人と過ごすことが久しぶりだったので、最初は大変戸惑ったが、スマイルファクトリーでも多くのことを学ぶことができていたので自分に自信がついていたので、何とか同年齢の友だちを作り、大学生活をエンジョイすることができた。



5名の関係者

- 保護者：中学校2年生の時にある事情で不登校になり、担任の先生にスマイルファクトリーがあることを教えてもらい、スマイルファクトリーに子どもが通うようになった。
- 保護者：子どもが2人いるが、2人とも不登校になってしまったが、2人ともスマイルファクトリーにお世話になった。スマイルファクトリーには、しんどくても行くようになり、大変感謝している。
- 保護者：スマイルファクトリーに通うのと、学校に通うのとでは、やはり違いはあるものの
- 大学教授：スマイルファクトリーがあることの意義を調査研究しているが、スマイルファクトリーの1日の終わりに振り返りをするのだが、「今日の MVP」というものがあるが、これが自己肯定感を持つことにつながっている。
- 大学教授：「今日の MVP」は、1つだけではなく、子どもたちの中から10も20も出てくる。スマイルファクトリーでは、こうした自己肯定感を醸成する仕組みと文化を作っているのである。子どもたち同士が子どもたちの良さをよく観察している。

- 保護者：スマイルファクトリーに通うようになり、子どもが明るさを取り戻し、友だちを呼ぶようになった。
- 体育教師：体育が苦手な不登校になることも多い。その意味で、体育が苦手な子どもに合わせてながらの体育の時間をスタッフミーティングの中で検討していく。
- 白井：スタッフミーティングでは、子どもたちのしんどさを観察しておき、それを出し合いながら、叱る役やほめる役などを決めながら進めている。授業は1人が主指導をするが、周りに4～5人のスタッフが一緒に活動しながら、サポートしている。
- 白井：8～9人の教員が常駐している。高校単位を取るためには免許がある人から教えてもらわなければならないので、退職教員の方にも応援をいただいている。大学生のボランティアスタッフもいる。
- 保護者：スマイルファクトリーで良かったのは、寝ることができる部屋があった。寝ることがこうしたしんどさを持っている子どもには必要である。
- 大学教授：スマイルファクトリーは、スタッフとしてスマイルファクトリーの卒業生が参加しているようになっている。このことは、スマイルファクトリーでの経験が成功体験として、今度は支える側に立ちたいと思うことにつながっている。
- 白井：スマイルファクトリーで育った子どもたちが、社会福祉的な職業をめざすことが多い。これが非常にうれしい。
- 白井：現在は、子どもたちの環境が多様になっており、その変化に教育がどのように対応していくかが議論になっている。昔は、不登校の児童生徒の問題はマイノリティな議論であった。
- 大学教授：子どもたちの変化は、自己肯定感、家庭環境、生活時間についてかなり変容してきている。スマイルファクトリーでの子どもたちの変容については、アンケート形式で今年度の終わりにデータとしてお見せしたい。
- 白井：スマイルファクトリーでの子どもたちの変化は、笑顔であるとか、話しかけた時の返答であるとか、大きな変化がある。子どもによっては、1ヶ月で変わる子もいるが、1年かかる子や3年かかる子もいる。

(2) 基調講演：文部科学省事務次官 前川 喜平氏

＜フリースクール等で学ぶ子どもへの支援にかかる経緯＞

- フリースクールに対する文部科学省の態度が変わってきた。
- 教育再生実行会議第5次提言（26年7月）が大きかった。この提言から大きく流れが変わってきた。
- 文部科学省の中にフリースクールプロジェクトチームができた。このチームリーダーは一度文部科学省を辞めた人間がもう一度やりたいということで配置した。
- フォーラムや検討会議では、白井智子氏も検討委員になっていただいている。
- フリースクール等で学ぶ児童生徒支援モデル事業（平成27年度補正予算）で、このスマイルファクトリーの事業も予算化している。
- 国会議員の中でも、超党派で「教育の機会の確保法案」を提出。今国会で間違いなく通ると思われる。



前川喜平文部科学省事務次官

＜文部科学省のフリースクールの考え方＞

- 平成4年の文部科学省通知の「登校拒否問題への対応について」
- 平成15年の文部科学省通知の「不登校への対応の在り方について」
- 平成4年は不登校を問題視していたが、平成15年は不登校への対応にということで、若干ニュートラルになってきている。そして、より民間施設との連携を進めるよう求めている。出席扱いについての考え方は変わっておらず、学校復帰を前提としている。

- 今年の9月に「不登校の児童生徒の支援の在り方について」という通知を出した。このタイトルだけでも、文科省のスタンスが変わってきていることがわかるのではないかな。
- この通知の中で、「不登校を問題視してはならない」不登校は問題行動と捉えてはいけない。問題行動等調査の中に不登校があるので、間違えやすいが問題行動等の「等」の中に不登校が入る。
- さらに、不登校は学校復帰だけを目的とするのではなく、社会的自立をめざすものであるというスタンスである。
- この通知の中では、フリースクールに加えて夜間中学においても不登校児童生徒の教育の機会の確保の一つとして挙げている。

<国会での法律の審議>

- 現在、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律案」が衆議院を通過し、参議院ももうすぐ通過し、成立する運びである。
- この法律案の中で、基本理念や国の責務、地方公共団体の責務、財政上の措置等について規定されている。
- この法律案が通れば、文部科学大臣は基本指針を定めなければならない。
- この法律案には、不登校児童生徒に対する教育機会の確保や夜間等において授業を行う学校における就学の機会の提供もうたわれている。
- 附帯決議として、不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮すべき等の規定もされている。

<不登校児童生徒による学校以外の場での学習等に対する支援について>

- 「フリースクール等に関する検討会議」審議経過報告の概要を平成28年7月6日に出した。
- この概要の中での基本的な方向性は、以下の3つである。
 - (1) 教育委員会・学校と民間の団体等が連携した支援の充実を図ること
 - (2) 家庭にいる不登校児童生徒への支援の充実を図ること
 - (3) 支援のための体制整備を図ること
- 具体的な施策としては、国は連携推進のモデル事業の実施、連携の先進事例の周知。教育委員会は地域の実情に応じ、連携に向けた取組を段階的に推進するというものである。
- これを受けて来年度の予算要求として、不登校児童生徒へのきめ細かな支援のモデル事業等の各事業について折衝している。

(3) パネルディスカッション：「池田市は、なぜフリースクールと連携できるのか」

パネラー 文部科学省事務次官 前川 喜平 氏
 池田市長 倉田 薫 氏
 池田市教育長 田淵 和明 氏
 スマイルファクトリー校長 白井 智子 氏



左から白井・田淵・前川・倉田氏

<はじめに>

- 白井：13年前はこのような会をもてることは考えられなかった。それが、池田市長の英断から始まり、本日このような会が持てて、大変ありがたい。

<ビデオ視聴「スマイルファクトリーについて」>

- 白井：うちに通う児童生徒の7~8割は何らかの発達障害を抱えている。主としてコミュニケーション力が低く、人間関係を持てなかったり、いじめにあったりして、不登校になる児童生徒が多い。

- 白井：フリースクールでは家庭科を中心に学習している。教科の学習よりも直接的な生きる力を育てている。
- 前川：いろんな課題を持っている児童生徒が増えている。その児童生徒の対応について、来年度の概算要求で発達障害と外国人の子どもへの対応を進めている。
- 倉田：フリースクールの代表としての白井代表を信頼して、自由にさせることで、ここまで連携できた。高校との連携は、池田市ではなかなかできないのであるが、それもやればいいではないかという事で高校との連携も池田市でやった。
- 田淵：既存のフリースクールと連携したのではなく、市の適応指導教室もあったのであるが、そういう公的な機関だけでは不登校の支援ができない部分もあったので、民間の活力を活かす意味で白井さんと相談しながら、不登校に対して積極的に一緒に取り組んできたので、13年続いた。
- 白井：このような事業ができるとは思ってもよらなかった。
- 倉田：教育委員会は当初抵抗していたが、一度わかったということになると全面的に協力してくれた。
- 白井：教育委員会は、すぐに学校復帰を目指しなさいというのではなく、その子供の状態を正確に見て、2年3年に渡る長期的なスパンで見てくれたので、伸び伸び活動を行うことができたのが大きい。
- 前川：黒柳徹子さんの窓際のトットちゃんという本があるが、公立の小学校を退学になったのであるが、トモエ学園に通った。このトモエ学園が、スマイルファクトリーである。文科省も変わってきた。学校はなくても子は育つ。学校でなくても子どもがきちんと育つという認識になってきている。ただ、学校復帰を前提といっても、学校に復帰したくなったら学校に復帰すればいいというスタンスでいいのではないか。
- 田淵：学校復帰を前提というのは変わっていないが、意識を柔軟にしていけることが子どもを大切にすることではないか。
- 白井：学校の先生がスマイルファクトリーに自由に行き来して連携している。学校とスマイルファクトリーを行ったり来たりしている子どももいる。また、学年が変わる時にどの子とクラス替えをしたら学校に行きたくなくなるかをヒアリングする場合もある。
- 倉田：みんながスマイルファクトリーに通うようになったらどうなのか。また、スタッフを集めるのはどのようにしているのか。
- 白井：スマイルファクトリーに来ている子どもも本当は学校に通いたいという気持ちを持っているが、しんどい時期に支えるセーフティーネットとしてのスマイルファクトリーの役割があると思う。また、スタッフも卒業生が支えてくれるようになってきているし、地域の方々の支援や大学生のボランティアが支えてくれる。教育学部の実習に来てくれている。
- 司会：スマイルファクトリーのようなフリースクールが全国に広がるためにはどうすればよいか。
- 前川：フリースクールがなくてもいいような学校づくりも必要ではないか。学校制度も変わってきている。しかし、それでも学校という制度で救いきれない子どもも必ずいるので、フリースクールの存在意義はあると思う。国も変わってきているので、地方公共団体の教育委員会もフリースクールに対するマインドを変える必要がある。何が何でも学校復帰という時代ではなくなった。フリースクールともしっかり連携していくことが必要である。
- 田淵：行政サイドとしても、スマイルファクトリーは中身も分かっているし、パートナーシップをもっていきたい。
- 白井：フリースクールを広げていくためではなく、子どもたちの一人一人の適切な教育をしていくための方法を広げていくことが必要である。



前川事務次官と倉田市長

- 倉田：不登校 12 万人をノーと言わず、その 12 万人のための教育の機会を確保するための国のマインドが変わっている。地方公共団体や学校現場も変わらなければならない。
- 前川：一人一人の学習の機会を保証するのは、今の学校のシステムだけでは難しい。また、家庭科・保健体育は生きていく上で非常に大切である。逆に高校の数学は、日常生活で使うことはまず考えられない。しかし、数学も何で勉強するのかということ子どもたちに答えていかなければならない。
- 前川：今の学校に対する拒否反応は子どもたちにある。ただ、今の学校は、一人一人の学ぶ意欲を大切にしようというものをベースにした方向性に変化してきている。本当に学校が変わりきったら、フリースクールはいらなくなると思う。
- 白井：本当にそうである。文科省の検討会議に出させていただいているが、文科省も本当に変化している。
- 倉田：私が心配しているのは、フリースクールの法律ができたなら、どんなフリースクールでも、教育委員会と連携を強要する状況になるのではないか。そんなことがあってはならない。
- 前川：怪しいフリースクールとは、教育委員会も連携しないようにきっちり取捨選択しなければならない。教育委員会がしっかりと把握していく必要もあるが、フリースクール同士の質の向上も是非求めていきたい。文部科学省が今回出した通知等は、全て成功事例を拾ってきている。スマイルファクトリーもそうである。こうした先進事例をナショナルスタンダードにしていきたい。
- 倉田：子どもたちのために、官民の連携が大変重要である。
- 田淵：連携というのは、どちらも言いたいことを言う中でお互いが連携していくことが必要である。スマイルファクトリーとは、今後も言いたいことを言い合いながら、相互理解を進めていくことで一人でも多くの児童生徒をきめ細かに支援することにつなげていきたい。



白井校長と田淵教育長

<質問>

- Q「一度学校に復帰したが、またスマイルファクトリーに戻った子どもがいるか。また、その際のケアや学校との連携はどうしているか。」
- A「存在している。そうした場合は学校と連携を密にして、行ったり来たりすることもあっていい。籍を離していない。現学校に籍をおいているという認識で学校も動いている。」
- Q「通知表や評価はどうしているか」
- A「スマイルファクトリーと学校とが連携していく中で、評価についても協議している。保護者の理解も必要であるが、学校とスマイルファクトリーが協議し、例えばこの活動のこの部分を評価していきましょうなどと進めている。公立高校を受ける場合も、早めにその情報をキャッチして、進路について保護者や本人と協議を進めている。」